

2014.11.5

御嶽山の噴火で多くの犠牲者

美しい山々と付き合っていくためにやるべきこと

御嶽山が 2014 年 9 月 27 日、7 年ぶりに噴火した。犠牲者は 70 人近いと思われる。紅葉シーズンまっただ中の土曜日で好天にも恵まれ、昼食を楽しむ人などが火口から 500 メートル以内の山頂付近にいた。その数、数百人。その方々が犠牲になったのだ。



御嶽山は標高 3067 メートルで、長野県と岐阜県にまたがり、東日本火山帯の西端に位置する。標高に比してアクセスが良く、日帰り登山が可能だ。富士山と同様「百名山」に数えられてきた複合成層火山で、大きく裾野を広げる独立峰である。もともとは死火山（休火山）と思われていたが、1979 年、突如として水蒸気爆発を起こし、その後 91 年、07 年と小規模な噴火を起こした。

さて明治以降、最悪の火山災害となった今回の噴火は、なぜこれほどまでに大きな被害となったのか。

まず挙げられるのが「突然」の噴火で「予知」できなかったからといわれる。しかし、専門家の中には「（御嶽山では）地盤の変化を調べる傾斜計は一つ、地震計も適切に配置されていない」と観測体制の不備を指摘する人も多い。十数年前に全国に 96 カ所あった測候所も全廃。火山研究者はわずか 40 人で不足している。今回の事故で問題点が浮かび上がる。

御嶽山の今回の噴火で死亡が確認された 47 人（10 月 3 日現在）の倒れていた場所や死因が明らかになった。死者 47 人のうち 46 人が噴石の直撃などによる損傷死（多発性外傷など）で、1 人は熱傷死（気道熱傷）だった。時速 300 キロ以上で降り注ぐという噴石の威力はすさまじく、一撃で致命傷になる。

山頂付近に、阿蘇山などにあるシェルターがあれば、火山性微動が起こったら避難を呼びかけるシステムがあれば、これほどの被害は起こらなかったはずだ。

日本の山々の美しさは 110 あるといわれる活火山のおかげだ。活火山とうまく付き合っていくために人間のやるべきことがたくさんあるのではないかな。

北河内高校生の就職を考える会
飯田光徳

激烈になる感染症との闘い

今年の夏はデング熱騒ぎで、蚊にもおちおち刺されることもできなかった。アフリカではエボラ出血熱が猛威を振るい、感染者数は 1 万人超との予測もある。エボラ出血熱は有効な医薬品が確立されていないだけに不安が増す。

研究者には、デング熱などの感染が、この間日本だけでなく世界で増加し、25 億人以上が感染のリスクに曝され、1 億人が毎年感染という見方を示す者もある。

人類の歴史は、実は感染症との闘いの歴史でもあった。今日、撲滅された感染症の一つである天然痘は何度も大流行。735（天平 7）～738 年の流行では当時権力の座にいた藤原四兄弟が全員死亡し、他の高位貴族も多数亡くなった。大仏造営のきっかけの一つがこの大流行であったことは教科書にも載っている。

最近の研究で古代の感染症の大流行と気温の関係が検討され、年平均気温より 3 度以上高温の時に大流行が起こっていることが解明されてきた。藤原四兄弟の亡くなった時期も高温期であったという。



今日の地球温暖化は、ウイルス達には絶好の環境なのだ。さらにヒトとモノが国境を越え動くグローバル化した社会ではますます感染症との闘いが激烈になってくる。「集団的自衛権」行使より、感染症との闘いの方が現実的な安全保障ではないかと思うのは、私だけか。

北河内高校生の就職を考える会
飯田光徳

地震大国 火山列島 日本に原発は危険すぎる

再稼働許さない声を広げよう